傷痕

――原子雲の下より記念会――

峠　三　十吉

岡本少年は読み終る
短い自分の詩を両手で捧げ
読み終ってしばらくと頭を下げる、
その頭には大きすぎる感がある、

崩れる家と母さんの死を
五才の頭でまともに受けた傷あと、
六年生になった今
原爆者とからかわれる痕がある、

「原爆が落ちてから苦しくなった」
という岡本君の詩が
しばらく日教組会館の階上を領する、
仇手を奪われた家の歪んだ柱と
未来を失って生存の暗さが
ちらちらした傷痕となって皆の心に喰い込む、

日雇の女は　土くれのしみた拳をにぎりしめ
乗り物に決してのらぬ娘らがマスクをおさえるうしろ
窓の一枚々々に
鋭く崖崩れした比治山があり
A、B、ととりかが丸屋根をつらね
そして[illegible]は死の効果をたしかめつづける（米原爆投下者）

そして
きがうの日赤六号室で　尾長の露路で
白血球が異状に抗進した少年の棺を見送った
広島の眼が
ぢっと詩を[illegible]
司会者も沈黙に耐える、